

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第12回 いしかわしょうきん 石川照勤

石川照勤という人

石川照勤は、明治2(1869)年10月10日、印旛郡坂戸村(現在の佐倉市)に父中村又十郎、母ヨシの次男として生まれ、幼名を兵蔵といった。その後、埼玉県川越市の本行院の住職であった石川照温の養子となった。

明治11年、9歳で成田山新勝寺に入り、第13世新勝寺貫首の原口照輪の下で得度し、名を照勤と改めた。照輪は、広く和漢に通じた師であったことから、照勤も影響され、知らず知らずのうちに学ぶようになっていた。同12年から13年までの間、直弥村(現在の佐倉市)の宝金剛寺ほうこんこうじにおいて修行に励み、同16年から京都の智積院中学林ちしやくいん(仏教徒のための教育機関)で、同19年から3年間、東京の同人社で学んだ。さらに、同20年には仏教哲学者の井上円了が創設した哲学館(現在の東洋大学)に入学し、同23年に第1期生として卒業した。円了とは、師弟関係を結び、成田山貫首の時代にも多くの指導と影響を受けた。

明治26年、修学最後の段階として、真言宗新義派大学林(現在の大正大学)において、真言の学問を修了した。

第15世新勝寺貫首となる

こうして学業をおえた照勤が成田に帰って青年僧侶として



右上/本町の山車の額「武勇」 右下/仲之町の山車の額「妍哉得國」
左/設立当時の成田幼稚園(『成田の歴史アルバム』より)

明治2年～大正13年(1869～1924)

印旛郡坂戸村(現在の佐倉市)に生まれ、25歳の若さで第15世新勝寺貫首となる。当時の成田中学校、成田図書館、成田幼稚園、成田山感化院、成田山女学校の五大事業を完成させた。また、成田山公園の開設工事に着手し、成田山の宗教的使命達成と地方文化の向上に多大な功績を残した。



活動して間もなく、第14世新勝寺貫首の三池照鳳(広報なりた3月15日号掲載)が体調を崩し、その後任に推薦され、明治27年1月31日、25歳で第15世新勝寺貫首となった。

明治31年3月、照勤は外国に遊学へ出た。アメリカでは宗教、欧州では宗教と教育の実情を視察、帰途のインドで仏跡を巡拝した。海外視察では宗教の状況を見ることが目的であったが、教育などの分野についても見識を広め、その後の活動に生かした。

明治31年10月、県内で初の私立中学となる成田中学校(現在の成田高校)が開校され、成田の教育機関の中心として発展を遂げた。同33年4月に照勤が帰国し、同34年1月に成田図書館(現在の成田山仏教図書館)を、同38年4月には、年少者教育の必要性を考え、成田幼稚園を設立した。また、同41年には成田山女学校(成田高校に統合)を設立。同年に千葉感化院を新勝寺裏に移転し、成田山感化院とした。この五大事業の完成によって、成田町の文化教育の発展に寄与するだけでなく、取り組みが先進的であったため、成田山の名を全国に広めることとなった。大正4(1915)年、五大事業完成記念として、本尊の開帳を行い、大僧正だいそうじょうとなった。

大正12年春、不治の病にかかり療養生活となり、同13年1月31日、56歳で遷化せんげ。成田祇園祭などで披露される本町・仲之町の山車の前面には、照勤直筆の額が飾られている。

参考：『成田市史』近現代編、『新修成田山史』(成田山)

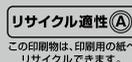
編集後記

また今年も、梅雨の時期がやってきました。雨の予報を見るだけで憂鬱な気分になる人も少なくはないはず。私も元々、雨の休日は一歩も外出しないことが多かったのですが、趣味で写真を撮るようになってからは「雨の日ならではの」を見つけに外へ出るようになりました。草花に寄り添う滴や、水たまりに反射する風景には、晴れの日には見られない輝きが。梅雨だからこそ、普段目を向けない「雨の日ならではの」を探しに出掛けてみませんか。

平成30年6月15日号 No.1365

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。